

Title	ブランコ・プリビチエヴィッチ著 職場委員会運動と労働者の管理、一九一〇-一九二二年
Sub Title	Branko Pribičević ; The shop stewards' movement and workers' control, 1910-1922
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1959
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.52, No.12 (1959. 12) ,p.1075(63)- 1081(69)
JaLC DOI	10.14991/001.19591201-0063
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19591201-0063">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19591201-0063</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

民自立政策の具体的な表現としてまず考察の対象となるし、又、領土制そのものの内部的構造を問題とする時にも、考察の対象は結局検地に落ち着いてしまうのである。勿論筆者は検地のみが封建領土制のすべてだと言うのではないが、少なくとも封建領土制をいづれの側からとり上げるとしても、絶対的に見落し得ない最も重要な研究対象であると言う事は認めざるを得ない。その事自体が既に近世初期検地の有している歴史的な性格を物語っているのである。つまり、どちらの側から接近しても検地に行き当ると言う事は、近世初期の検地が、封建領土制的土地所有及び保有関係の二つを同時に造出したのであると言う命題を成立せしめるのである。この事は既に安良城盛昭氏によって指摘されたところでもあった。<sup>(1)</sup>しかし、氏はそこでは「地方知行」制について何等触れていない。それは氏に従えば、封建領土制の形態であるから触れる必要はないのである。が、現実に存在する「地方知行」制をやはり歴史的に位置づける必要は存在するのである。筆者は本稿で浅野氏の下に展開している地方知行制が、中世的な「遺制」ではなく、それ自身「近世」の所産である事を不十分乍ら主張した積りである。しかし、浅野氏は繰り返して述べておいた様に、中世以来の伝統を持たない典型的な「近

世大名」であるから、浅野氏における事例の証明をもって、近世初期に存在するすべての地方知行制を全面的に同一のものとして解釈する事は早計である。最終的な結論は異なった種々の系譜を持った封建権力下における地方知行制を比較検討する事によって初めて得られるであろう。本稿はその素材の一つとして、今迄意外にも藩政史研究上の盲点であった浅野氏の如き典型的な「近世大名」の一つの事例を提供するものである。得られた結果は、結論として成立し得ぬ程のものにすぎず、むしろ事実の提供以上には出なかつたと言つても過言ではない。

問題は更に残っている。近世の知行形態に地方知行制と歳米給付制の二つが存在すると言う事は何を意味するのか？ 仮に、地方知行制が、一般に、中世の「遺制」ではなかつたとしても、近世のある時点を境目として消滅しなければならぬのは何故か？ これらの疑問も矢張り考察の範囲を拡大せねば解決されないのである。

(1) 安良城盛昭『幕藩体制社会の成立と構造』二二八―三三三頁参照。

## 書評及び紹介

ブランコ・プリビチュエヴィッチ著

『職場委員会運動と労働者の管理』

一九二〇—一九二二年』

(Branko Pribicević: The Shop Stewards' Movement and Workers' Control, 1910—1922, 1959.)

一九世紀末期から二〇世紀初頭までの時期は、ヨーロッパのすべての国の労働運動に、社会主義と階級闘争の激浪が未曾有の規模をもっておしよせた時代であった。とくに、資本主義の母国「イギリス」においては、一八七〇年代にはじまる慢性的な恐慌を契機として、資本主義は帝国主義段階へ突入し、それとともに労働貴族的熟練労働者層を基軸とする封鎖的全国的職業別組合にたいして、不熟練労働者の新組合運動が勃興し、社会主義が労働者階級の革命的イデオロギーとして、再び彼らの心をとらえるに至った。資本主義列強の間における植民地再分割と熾烈な経済競争とが、やがて大破局としての第一次世界大戦の不気味な暗影を労働者階級の生活に投じつつあった二〇世紀初頭、イギリスの労働者階級の運動は、いわゆる「大不安」(“The Great Unrest”)の波にのみこまれていった。この労働上の大不安は、どのような原因からひきおこされたも

のであろうか。いまこれをつぎのように要約してみよう。(一)帝国主義列強間における侵略主義激化の矛盾とその労働者階級の負担への転化、その結果としての実質賃金の下落、労働条件の悪化、(二)イギリス労働党のこれにたいする無為無策、(三)サンディカリズム、産業別組合主義、そしてやがてギルド社会主義などの思想の労働組合運動への深刻な影響である。

かくして一九一〇年前後から第一次世界大戦勃発までの数年間、労働者階級の間には、「直接行動」を主張する革命的なサンディカリズムの思想が浸透するに至った。すなわち、(一)労働者階級の議会活動にたいする不信とその否認、(二)直接行動、ゼネラル・ストライキによる資本主義の打倒、(三)職業別組合の産業別組合への再編成、(四)革命の担い手としての労働組合と労働者による産業の管理、こうした思想が、次第に支配的となり、このような状況のもとにギルド社会主義のような特殊英国的な思想が発生した。

この一九一〇年前後から第一次世界大戦後の一九二二年頃までの時期は、ロシア革命の勃発とそのイギリス労働運動への深刻な影響もあって、ショップ・スチュアート運動の労働組合運動の支配とこれに密接な関連を有していたさまざまな社会主義思想とが、「労働者による産業の管理」をもって、新社会樹立のための不可欠の手段として要求し、奮闘しつつあった。著者ブランコ・プリビチュエヴィッチが本書のなかで意図しているところのものは、こうした労働者階級による産業の支配の思想と運動とを、この運動のもっとも激し

くおこなわれた機械工の組合を中心に追求したものである。はしがきによればプリビチェヴィッチは、ユーゴスラヴィアから、英国文化振興会 (The British Council) の招きでオックスフォード大学ナフィールド・カレッジ (Nuffield College) に三年間わたくし留學し、その間今は亡き G・D・H・ユール教授の指導を受けて、イギリス労働運動の研究をした人である。ベルグラードの労働運動研究所 (Institute for Labour Movement) の研究員として将来を嘱目されており、本書の主題である「労働者による産業管理」の思想と運動のひとつであったギルド社会主義の往年の闘士であった故ユール教授が、推薦の序文を書いていることは誠に興味深い。

本書は、つぎの諸章からなっている。一、序説、二、機械工、三、機械工とその組合、四、機械工組合と労働者の管理、五、合同委員会運動、六、職場委員会および労働者委員会運動、七、労働者の管理のための職場委員会運動の闘争、八、ギルド社会主義者と機械工である。

著者は序説において、つぎのようにのべている。「この研究の目的は、機械産業における労働者の管理の理念の発展を吟味し、とりわけその理念を確信させるにいたった産業の状態、機械工によって提唱されたいくつかの実践的な提案、さらにその当時のいろいろ異なる社会主義思想によって擁護された労働者の管理の一般的な原則にたいするこれらの計画や提案との関係を吟味することである」

形で証明された。

著者は、その他の産業への労働者の管理が波及した例として、通信労働者組合 (The Union of Post Office Workers) および建築業労働者にたいするギルド社会主義の影響をあげ、とくにその野心的な計画のゆえに却って失敗した事実を指摘している (pp. 9-10)。以上は、序説にのべられている労働者による産業の管理の運動と思想についての概観である。そこでいよいよ本論に入ろう。

すでにサンディカリズムや労働組合主義およびギルド社会主義の運動がおこっていたころ、第一次世界大戦が勃発したのであるが、著者は、この大戦がイギリス労働組合運動にあたえた影響を考察しつつ、とくに機械工組合における産業管理運動の必然性にふれている。すなわちつぎのようである。「機械業における労働力の構造は、その当時の機械業労働者およびその組合が直面した多くの複雑な問題に対する鍵である」 (p. 25)。最初は、(一) 熟練労働者 (skilled workers)、(二) 不熟練労働者 (less skilled or unskilled helpers) の二つの労働者群から成っていた機械産業は、一九一〇年前後には第三のグループ、半熟練工 (semi-skilled workers) の出現によって、とくに第一次大戦の勃発にともなうその種の労働者の増大によって大きな問題に直面するに至った。元来、熟練工の組合としての合同機械工同盟は二百以上の職種 (crafts and trades) に跨っており、その間の労働移動は少なく、定められた徒弟期間を終了したものでなければ加入できず、従って独占的封鎖的傾向を強くもっていた。

(p. 25)。労働者による産業の管理の理念は、今世紀初頭、第一次世界大戦勃発までの時期に、トム・マン等によって提唱されたサンディカリストの運動、その失敗後これに代ったギルド社会主義の運動、そしてさらに第一次世界大戦の末期、ロシア革命の影響によるマルクス主義者の運動と、労働組合運動のいわば上部構造としてのイデオロギーの推移の、労働組合運動の変貌との関連において絶えず意識されてきた重要な問題であった。まず一九一〇年代前後を中心とするサンディカリズムは、鉄道従業員組合に浸透し、一九二二年の合同鉄道従業員組合 (The Amalgamated Society of Railway Servants) の年次大会において、労働者による産業の完全な管理を支持する決議が採択された。その後サンディカリズムの勢力の後退にともない、国家、消費者および労働者による国有化された鉄道の管理の必要性と、つぎにはギルド社会主義の影響をうけて、主として労働者による共同管理 (Joint Control) の思想があらわれはじめ、国有化運動から進んで労働者による鉄道の共同管理のためはじめるが、政府の圧力を排して戦争中もつづけられていった (p. 6)。同じような経過が炭坑夫の場合にも見られた。労働者の炭坑国有化と共同管理を主張する坑夫連盟 (The Miners' Federation) の要求を緩和するために設けられたサンキー委員会 (The Sankey Committee) は、いわば労資双方による協議制であって、連盟内部の左派的な分子からはげしい批判をあびた。事実、サンキー委員会の無力は、やがて、政府によってその勧告が全く無視されるという

労働力構成の複雑性は、そのまま機械工の組合運動の構造にも反映し、あらゆる階層の機械工を包含するような組織は見られなかった。まず第一に、熟練労働者だけを独占的に加入させる職業別組合があったが、その種類はまた複雑で、(一) 全国組合 (National Unions)、たとえば合同機械工同盟や船大工組合もしくは地方組合 (local craft or trade) を基礎とする組合 (たとえば連合鍛冶工組合) もしくは近似の職業の全グループ (たとえば合同機械工組合、蒸気機関製造工組合など)、(二) 機械産業に従事している熟練職人だけを独占的に加入させる組合 (たとえば蒸気機関製造工組合や合同工具製造工組合)、(三) 主として機械産業における労働者だけであるが、他の産業に従事している機械工の加入をも認めるもの、(四) 機械産業のほかに、たとえば大工や指物師をも入れる組合、(五) 最終的な生産物を基礎にした組合 (たとえば蒸気機関製造工組合、科学器具製造工組合) もしくは労働の過程において使用される主要な材料にもつく組合 (たとえば蒸気機関工組合もしくは科学器具製造工組合)。こうした熟練機械工の団体は、一九一四年以前およそ二〇〇人のほり、その組合員総数は四五〇、〇〇〇人に達した。

一方、熟練労働者の組合にたいして、あらゆる産業に不熟練労働者よりなる一般組合 (General Unions) があり、とくに一九一四年以前においては鉄道従業員の間、この種の組合運動が活潑となり、全国鉄道従業員組合は、その産業に従事するあらゆる労働者に

加入を認め、一九一四年には三〇、〇〇〇人が組織されたといわれる (pp. 24-28)。著者は以上のように機械産業の労働力構成について分析を試みたのち、熟練工組合 (Craft Society) 内部の矛盾として、(一)技術革新と新式機械の採用による仕事の単純化と熟練工組合の役割の減少、(二)従って半熟練工と熟練工との間における労働力の質的差異の減少、その結果としての半熟練工の進出、(三)半熟練工の浸蝕されることの必然的結果として、同じ職業および同じ産業 (similar craft and trades) の熟練工組合間における仕事の奪い合いについてのべている。このような状況のなかで、組合運動における新しい動きとして当時最大の熟練工組合であった合同機械工同盟によって、(一)あらゆる熟練工組合の合同運動 (Amalgamation Movement) がおこなわれたが、クラフト的偏見を克服できず失敗、そこでより緩和された形での、(二)機械及び造船業労働者連盟 (The Federation of Engineering and Shipbuilding Trades) の結成とその無能があげられる。

第一次世界大戦前における巨大な職業別組合としての合同機械工同盟の独占的地位の崩壊とその矛盾の解決策として、(一)もっとも保守的なものとして、合同機械工同盟を頂点とするクラフト・ソサイエティの合同、(二)中間的な方法として、クラフト・ソサイエティの連合、(三)合同機械工同盟内部におけるもっとも進歩的な意見は、半熟練工の前進にたいして無意味な闘いをすることなく、彼らを機械工同盟に加入させるよう再組織することであった。第二章において

機械工組合の運動内部における質的な変化は、戦中戦後の革命的な時期に、急進的な合同機械工組合 (Amalgamated Engineering Union) の成立をもたらし、またそれによって機械工は、偉大な力を獲得したのである。

第三章においては、この機械工組合に、いかにして労働者による産業管理の思想が浸透したか、この両者の関係について論じられている。著者によれば、鉄道従業員および炭坑労働者の場合、産業国有化はつねに熱心な要求であったのに反し、熟練労働者として比較的高い賃金を保障されていた機械工の場合は、巨大な設備の傍には小さな工場が存在し、近代的な高度に機械化された工場とまったく機械化されていない仕事場が併存しているという複雑な条件のもとで、産業の国有化には無関心であり、従って機械工組合もまたそういう努力を払わなかった (pp. 41-52)。機械工をして、「労働者による管理」にめざめさせた直接の動機となったものは、第一次世界大戦の勃発にともなう「労働力の稀薄化」の問題に関連してであった。政府の稀薄化政策と労働移動のための調整機関として、労資双方からなる地方軍備委員会 (Local Armament Committee) の設立の目的は、いうまでもなく軍需品の生産の増加であったが、当時、ギルド社会主義者は、そのなかに、経営にたいする労働者の権利の決定的な公式の承認を見出したのである (pp. 42-45)。合同機械工同盟のように、熟練工の特別な利益を擁護し、戦時中にさしとめられた権利の戦後における復活の満足すべき保障を獲得するために政

著者は、このような矛盾に直面する機械工組合の苦悶の過程において、合同機械工同盟の労働組合運動における地位の相対的な没落、第一次世界大戦の勃発にともなう産業休戦、戦争の進展によって、あらゆる社会的・技術的な配慮が戦争の遂行のために奉仕を強いられた結果、熟練労働者の減少と不熟練労働者の増大によって、労働力のいわゆる「稀薄化」(“diltion”) という問題が重大化し、そのために熟練労働者の生活水準の悪化をもたらしたことを指摘する (pp. 32-34)。

戦争という異常な事態は、労働組合の機能をまったく麻痺させる結果となったのだが、それと同時に、組合に代って「稀薄化」にもなっておこるいろいろな問題をはじめ、職場の日常的な要求や不満をとりあげる職場委員の運動が必然的におこらざるをえなかった。そしてさらに進んで職場委員を代表する工場委員会 (Workshop Committee) の運動がおこり、この運動が戦前戦後を通じての労働組合運動において偉大な役割を果し、とくに、つぎのような諸結果は重要であると著者は指摘する。(一)従来の組合は、職場委員運動をもって、自己の権威に対する挑戦とみて反対 (のちにこの種の偏見は克服された)。(二)産業における労働力構成の変化、熟練工、不熟練工の賃金の格差および労働条件の差異の減少、さらに、あらゆる階層の労働者にたいする熟練工の優越性の後退、(三)職業別組合主義の弱化とともに、争議は地方的でなく全国的な様相を呈する。(四)組合の指導者と一般組合員大衆との間の重大な破綻である。こうした

府の政策に接近するものもあったが、これとは別に、ギルド社会主義者やサンディカリスト、トム・マン (Tom Mann) 等によって、労働者による産業の管理が強調されるに至った。マンによれば、職場委員、労働者委員会および産業別組合こそ、労働者の管理の主要な機関であり、「巨大組合」(One Big Union)こそ、完全な管理の実現にとって是非必要であるというのであった (p. 51)。

彼の理論の特徴は、その宣伝を労働者の日常的な諸問題——たとえば失業とか請負仕事とか——に結びつけこれを団体協約の制度のもとで解決しようとしたものであって、本質的にはギルド社会主義と産業別組合主義との混血児的性格をもっていた (p. 52)。かくして産業の「労働者による管理」をめぐる労働者の対立が激化し、一九二二年のストライキに見られるような危機がおとすれた。

第四章は、サンディカリズムの労働組合運動への浸透の結果としておこった合同委員会運動 (Amalgamation Committee Movement) についてふれている。著者によれば、第一次大戦の不安の時期における機械工の場合には、職業別組合克服のための方策として、(一)公式の労働組合の径路を通じて、現存の組合の合同をはかること、(二)現存の労働組合を全く断念して、新しい組合を建設すること、(三)労働者が直面している主要な問題の解決のために、政治活動にのり出すことが考えられた (pp. 65-66)。結局トム・マンによって、やがてサンディカリスト運動と結びつけられるに至った。サンディカリストの方針は、非公式の合同委員会をあらゆる産業

に建設させ、且つある種の中心的、調整的な団体を通じて、運動を支配することであった。一八二二年一月ロンドンで開かれたサンディカリスト連盟と合同委員会の共同会議の目的は、労働組合の再組織、すなわち職業別組合の合同であり、それによって、機械産業に働くあらゆる労働者をして、その階層や性別を問わず加入させることであり、「連帯と直接行動」によって、労働条件を改善することとまらず、資本主義社会を改革することであった (p. 11)。この過程において実践的なトム・マンの戦術と極左的なワトソン (W. F. Watson) の思想の対立を秘めながら、ショップ・スチュアートの運動と接触し、サンディカリズムから産業別労働組合主義への傾斜を深めていった。合同委員会の運動は、各地に大きな影響力をもつに至り、多くの労働組合支部、地方委員会、労働組合評議会などの加入などは、その勢力の増大を意味していたが、しかし結局は、工場に直接の脚をもたない運動であった。すなわち宣伝団体であって、実際的な問題を処理しなかった。その運動の主要な目的は、産業の管理を確保することであって、ワトソンは、サンディカリズムから産業別組合への戦術的転換のなかで、当然職場委員制運動との結びつきを強化する必要にせまられたのである。

第五章および第六章は、本書の重要な課題である職場委員制運動と労働者による生産の管理について、その両者の密接な関連についてふれている。ショップ・スチュアートの運動は第一次世界大戦中の一九一五年の夏、スコットランド南西部の工場地帯クライド地方に

起ったクライド労働者委員会の結成に端を発するものであった。それは、一九二二年の夏、政府の機関、全国管理委員会 (National Administrative Council) がその解散を決議するまで、機械工の労働組合運動の発展に非常に重要な役割を果し、急進的社會主義運動全体にいちじるしい影響をあたえたものであった。著者によればこの運動の重要性は、(一)非公式な組合員大衆の運動として発展したこと、(二)機械産業における労働者の管理のための闘争に、もっとも偉大な役割を果したこと、(三)これが戦争という異常な事態のもとでおこった自然発生的な運動であったこと、そしてもっとも重要な特徴は、(四)その運動の指導的な人々の大部分が、資本主義の廃棄を、その主要な目的のひとつであると信じていたという意味で、革命的な運動であった。

クライド工場委員会は、主として産業労働者よりなる活潑な少数者の集まりである社会主義労働党 (Socialist Labour Party) によって指導されていたが、そのなかにはガルラッハー (W. Gal-lacher) やカークウッド (D. Kirkwood) のようにそれぞれ英国社会党 (British Labour Party) や独立労働党 (Independent Labour Party) に加入していた者もいた。しかしその後の発展の過程において、つぎのような種々の問題を生ずるに至った。(一)「労働の稀薄化」からおこる実際的な問題にのみ専心するショップ・スチュアートのおよび工場委員会に批判的な社会主義労働党、(二)ショップ・スチュアートのギルド社会主義の漸進主義・平和主義を離れて、

産業別組合主義に接近、(三)しかもその両者における反撥をして更に、(四)合同機械工同盟とのヘゲモニー掌握をめぐる闘争などである。すなわち著者によれば、ショップ・スチュアートの運動が、産業別組合のために努力する限り、産業別組合主義者はこれを支持する用意があったが、改良主義的傾向に走ったり、もしくは産業別組合運動の建設をひきのばしたりするならば、両者の間に闘争がおこったのである (p. 83)。しかしながら、ショップ・スチュアートの運動にみられるこのような態度は、ボルシェヴィキ革命の勃発とその英国労働運動への波及によって、根本的な変化をこうむり、いちじるしく政治的な色彩をおび、マルクス主義者の支配的な影響をうけるにいたり、イギリス共産党成立の中核的な組織となったのである。

以上著者は、本書の内容を章を追って、問題点を指摘しながら紹介を試みた。運動の推移や経過をきわめて詳細に論じており、この種の研究の少ないなかにおいて、たしかに注目し得る。わずかの紙面で筆者の紹介も不手際をまぬがれないが、本書の一大欠点は、問題がよく整理されていないことである。この点をもっとも強く感じさせるものは、本書がいくつもの単独の論文集のような観を呈し、相互に関連性のある問題をとらえながら、その間に隙間があり、もしくは重複がみられたりして、文章の非常に流暢にもかかわらず、きわめて読みにくいことである。ついでにいまひとつ指摘するならば、職場委員会運動や産業管理の運動の内部的な関連や分析は非常にすぐれているけれども、その運動の必然性の究明をたとえばイギ

リス資本主義の矛盾や社会主義運動の流れのなかで把握することができず、あくまでも機能的な研究、従って機械論的な説明に墮している傾向がみられるのは惜しむべきである。以上のような弱点にもかかわらず、筆者は、本書によって非常に多くのことを教えられたことを告白しなければならぬ。とくにこの問題については今まで閉却されていた面、たとえば、サンディカリズム、ギルド社会主義、産業別組合主義およびマルクス主義の労働組合運動にたいする役割の評価などは、きわめて興味深いものがある。(飯田 豊)

F・ゲー

『十八世紀ベリにおける

生産・価格・土地の収益性』

Francois Gay, "Production, prix et rentabilité de la terre en Berry au XVIII<sup>e</sup> siècle." Revue d'histoire économique et sociale. N° 4, 1958, p.399-411.

1

フランス農業の発展過程のなかで、十八世紀は革命の仕事をしたといわれた。この変革過程を、経営形態の側面から把握しようとするれば、農業経営でいけば共同規制を必要としなくなるような体制転